正休寺だより

第2号
平成19年6月1日発行
板柳町大字板柳字土井241
TEL.0172-73-2016

正休寺だより（歴史）

正休寺の始まりは、今から四五一年前の弘治二年（一五五六年）に、水戸の国から照願寺（現・茨城県那珂郡美和村大字鷲子、住職＝高澤信司）の順義上人が本願念仏の教えを陸奥国に広めることを願いとし、お供の者十数名と共に下向され、波岳（なみおか、現青森市浪岡町）の松枝の山中に大道精舎（大道寺）を建立したことに始まります。

元亀元年（一五七〇年）には津軽藩の意向により堀越城下（弘前市堀越）に移転するなどしましたが、正保三年（一六四六年）板屋野木（現在の地）に移り、堂宇を建立して万治二年（一六五九年）に板屋山正休寺を名乗り、明治初年に五雲山正休寺と改めました。

本堂は明治二十四年（一八九一年）の博労町の大火で類焼しましたが、山門は消失を免れ、現在板柳町最古の木造建築となっています。寛政年間（一七八九～一八〇〇）の建立と推定され、その構造の特徴により昭和六十一年板柳町重要文化財第二号に指定されました。

消失した本堂は茅葺屋根で現在の本堂と同じ規模のものであったらしいが、消失後二十年たった大正元年に本堂落慶法要が行われていることから、当時の人々の法儀相続のご苦労がしのばれます。

なお、はじめ私たちのお寺は大道寺という名前でしたが、正保四年（一六四七年）に津軽藩の家来であった大道寺為久が家老になったので、当時は藩主や家老と同じ名前を使用してはならないのがしきたりだったため正休寺と改称されました。

正休寺古文書

▼古文書

弘治二年（一五五六年）、当寺開基大道院順義上人当国に入り波岳一里の西、松枝村の山中に住し、同伴人大室義左衛門清氏、土岐信濃弘邦、青山主計氏共、前田左馬之丞利玄、浦山太郎左右衛門、従僕長次朗

㊟（正休寺の開基順義上人が今の浪岡町に下向するにあたり十数名の武士を従えてきたことがわかり、当時の武士の名前がはっきりと残っていることは非常に貴重な資料である）

真宗まめ知識

お内仏の掛軸

真宗のお内仏（ないぶつ）〔仏壇〕には、中央にご本尊の阿弥陀如来が、その左右にはお脇掛（わきがけ）のお名号（みょうごう）が荘厳（かざ）られています。

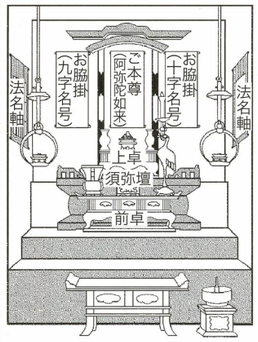
ご本尊は、一般には仏具店から求められることが多いと思いますが、ご本山（東本願寺）から絵像（掛軸）のご本尊をお受けすることができます。

お脇掛には、お名号の掛軸（向かって右に十字名号、左に九字名号）をお掛けいたします。お脇掛も、本山からお受けすることができます。

また、亡き人の法名軸は、左右の側面にお掛けいたします。新しい法名は左側に、古い法名は右側です。片側に二軸お掛けできる場合は、手前に新しい法名軸をお掛けください。

「お仏壇」と呼ぶのが一般的ですが、真宗では、我が家の仏様というような意味で「お内仏」と呼び習わしています。

世間では亡くなった人が無いのに買うものではない」と言う人もあるようですが、そんなことはありません。平生のうちに、ご本尊に手を合わせる生活をし、本願念仏の教えを聴聞（ちょうもん）していきましょう。



公開講座のお知らせ

「仏教と現代」講座

◆日　時　六月十二日（火）
　午後一時～四時三十分
◆会　場　正休寺
◆講　師　田代　俊孝氏
　（同朋大学教授）
◆テーマ
　脳死・臓器移植を考える
　～心と心のつながりの中で～
◆参加費　無料

青森県第二組同朋大会

◆日　時　六月十六日（土）
　午後一時～四時
◆会　場　弘前市民会館
◆講　師　重松　清氏
　（直木賞作家）
◆ミニコンサート
　あずみたくみ＆ブリーズ
　（ピアノボーカルユニット）
◆テーマ　つながりを愛して
◆入場料　五百円
　（お寺へお申し込みください）

正休寺同朋会のお知らせ

◆定例会
※同朋会では毎月第二火曜日午後一時から三時に定例学習会を開いています。
『歎異抄』をテキストにお茶お菓子をいただきながらいろんなことをおしゃべりしています。
また、日帰り旅行、新年会、など多くの企画をしています。年会費2千円で何時でも入会できます。入会希望の方はお寺までご連絡ください。

同朋会日帰り旅行のお知らせ

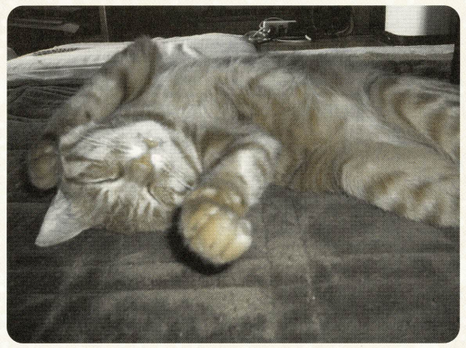
◆日　時　七月二十日（金）
　行き＝午前八時
　正休寺出発
　帰り＝午後四時
　正休寺到着
◆参加費　3千円
◆行き先　姫の湯ホテル
　他観光有
　（秋田県八幡平湯瀬）
◆締切り　七月十三日（金）
※同朋会員以外の方は5千円でご参加いただけます。

お庫裡からのつぶやき

岩木山の河川公園から拾われお寺へ引越ししてきた子猫。ふらふらと歩くその姿は、見るから生後数日。その「ミルク」が家族の一員になってもうすぐ一年になる。

最近は鳴き方にも色々な表情が出てきた。「その目、その鳴き声であなたは何を訴えているの？」一生懸命理解しようとする。

人と人との間には言葉があるのに・・・・・・・。



「初御講」に満堂の参詣

本堂で三味線演奏行われる

初御講がさる二月二十八日執行されました。今年はお勤めの後、住職の法話に引き続き三味線演奏が行われました。演奏は弘前の民謡酒場で修業されている若手の三味線演奏家二名で、予定の時間をオーバーする熱演でした。

引き続き御斎（おとき）となりましたが、一部大広間に入れない方もおられるなど、二百五十人分の準備が足らなくなる程でした。「ねりこみ」「氷頭なます」等の津軽のお料理。お寺に来て食べるのが楽しみだと言う嬉しい声も聞かれました。

参詣者全員で大広間において御斎（仏事の食事）をいただく。

なぜ人間は生きるのか

後生の一大事

一喜一憂の生活

私たちは日常の生活の中、それぞれに仕事を持ち、喜んでみたり、悲しんでみたり、苦労もあり、楽しみもあり、損もあるが得もあって、なかなか賑やかな生活をおくっています。そして口を開くと、損したとか儲かったとか、良かったとか悪かったとか、色々伴奏が入って、いよいよ賑やかな生活でありますが、はたして人間生活というものは、一喜一憂だけで成り立つものなのでしょうか。こういう点から、ひとつ検討してみるのも大切なことだと思います。

心がバラバラ

仏教では、暑いとか寒いとか、雨が降って天気が悪いとか、そういう一喜一憂の生活の意識を、「散心」と教えています。「散心」とは意識が散るということです。つまり、心が現れた対象に散っていく。暑ければ暑いということに心が動く、高いとか安いという対象に対して心が走る。もうひとつ言いかえて言うと、見れば見るものに心が動かされ、聞けば聞いたものに、考えれば考えたことに心が縛られる。だから心というものがバラバラになって、どこに自分があるのかさっぱりわからないという生活が、日常生活の特徴でもあります。

疑問を持たない生活

こういう生活は、また非常に忙しい生活であります。それはそのはずで、見れば見たものに心が動くのだから、もうこんな忙しいことはない。対象がグルグルと変わる。ただ忙しいがあるだけです。

そして、近年ますます人間が忙しい時代になってきた。ゆっくり物事を考えていることが許されないというやむをえぬ現実もあるわけですが、なぜ忙しいのかと考えてみることが必要ではないでしょうか。

日常生活の多くは、忙しさの中何の疑問もない生活です。「なぜ」と問うていくことのない生活、そういうのを「散心生活」と言います。

なぜ忙しいのかと尋ねると、だれもが「稼がなければ」という。「なぜ稼がねばならないのか」こう聞かれると、「食わなければ」と。「ではなぜ食わねばならぬか」ともうひとつ聞くと、「食わなければ死ぬ」と。なぜ、死んで悪いのか、そんなことは考えたこともない。

「それは生まれたからだ」というかもしれませんが、それは理由にはなりません。

食っておっても死ぬ

「生まれた以上は生きていかねばならぬ」という意味はどこにあるのか。それが少しもはっきりしない。人間が生きているということにどういう意味があるのか。どうすれば生きているということの意味を本当に果たし得るのか、考えたこともないのではないでしょうか。確かに食わねばならぬということは、大事なことであります。しかし、食わないと死ぬのだけれども「食っておっても死ぬ」という矛盾がある。大きな矛盾です。なぜ、生きなければならないのか。何のために生まれてきたのか。そういう問題が明らかにならない生活というものは、百年たっても何も生まれてこない。

非生産的生活

「何をしに生まれてきたか」「なぜ生きなければ生きねばならないのか」と聞くと、どうも答えが出てきません。最後には「それは、親が生んだからだ」と。この世へ親が私を放り出し、そのはずみで生きているということなのでしょうか。それでは、何のために生きているのか、訳の分からぬことになります。

極端にいうと、そういう生活を百年繰り返しても、何ものをも生まないという非生産的生活、これが日常ということでしょうか。冬の間は寒い寒いと言い、夏になれば暑い暑いと言う。それでしまいであって、来年になると、また寒い寒いと言い、暑い暑いと言うに違いない。つまり繰り返し、それでどうなるのかというと、何にもならない。繰り返しの生活は何も生まれてこない。非生産的生活というものが日常生活なのです。

本当の自分の発見

日常生活のもう一つの特徴は、大事な根本問題が、どこかで見失われているということです。つまり、たしかに食わねば死ぬのだから、食わねばならぬということは非常に大事なことです。しかし、それよりももっと大事なことは、何のために食べているのかということではないでしょうか。だから、食うことは二番目に大事なことです。「何のために生きねばならないか」という問題を抜きにするならば、何のために食べているのかサッパリ分からないこととなる。

「食べる・食べれない」は厳しいけれども浅い問題です。それに対して、究極の問題が一つあります。それは蓮如上人の言葉で、「後生の一大事」と教えておられる「生きる」ということの問題。何のために生まれてきたのか。人生というものは、どういう意味があるのか。こういう問題が明らかにならなくては結局、本当の生活にならない。自分を見失って百年生きても、生きたことにはならない。大事なのは、本当の自分を発見し、自分を取り戻すことではないでしょうか。

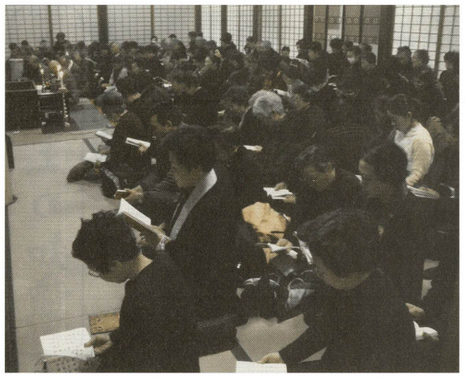
（文責・住職）

永代経法要三日間執行

春のお彼岸に引き続いての正休寺永代経法要が三月二十六日から二十八日の三日間執行されました。講師は毎年北海道からおいでいただいている竹橋修師。

永代経法要は、これまでにお紐解（登録）された亡き方のお名前（法名）を記載した法名軸を余間に奉安し、永代にわたってご崇敬申し上げる法要です。法要では全員で正信偈を唱和し、続いて北余間（法名前）での読経・焼香が行われます。

三月二十八日の御斎の当番は「新和講中」でした。また、四月二十八日の御講は「板柳講中」の当番で勤められました。各講中の役員様には献立から食材の買出し等、当日の準備本当にご苦労様です。



正休寺「御講」当番

五月二十八日・・小阿弥講中
六月・・・・・・休み
七月二十八日・・畑岡講中
八月二十八日・・六郷講中
九月・・・・・・休み
十月・・・・・・休み
十一月二十八日・沿川講中
（報恩講二十六日～二十八日）
十二月・・・・・休み